北島敬三 写真展　借りた場所、借りた時間

Keizo Kitajima: *Borrowed place, borrowed time*

――北島敬三を「読み返す」

国内外で高い評価を受ける写真家・北島敬三。長野県須坂市に生まれた北島は、1975年に東松照明、荒木経惟、深瀬昌久、細江英公、森山大道、横須賀功光らが講師を務めた「WORKSHOP写真学校」への参加をきっかけに本格的に写真を始めました。翌年に同校が解散すると、森山らと自主運営ギャラリー「イメージショップCAMP」を立ち上げ、初個展「BCストリート・オキナワ」（新宿ニコンサロン、1976年）や、月1回の連続写真展として12回にわたって開催された「写真特急便 東京」（イメージショップCAMP、1979年）、東京とコザ（現・沖縄市）を往復しながら隔月で開催された「写真特急便 沖縄」（同、1980年）などで精力的に作品を発表し、仮借なく被写体を捉えるそのスナップショットは森山をして「白昼の通り魔」[*1]と言わしめた一方で、『カメラ毎日』の編集長を務めた西井一夫からは「ストロボ一発」を多用するスタイルを批判されます[*2]。賛否を巻き起こしながらも、「写真特急便 東京」で日本写真協会新人賞を受賞（1981年）し、その賞金で滞在したニューヨークのストリートスナップをまとめた写真集『New York』（白夜書房）で第8回木村伊兵衛写真賞を受賞します。

その後も、冷戦構造の歪みが際立つ東西ベルリン、ワルシャワ、プラハ、ブダペスト、香港、ソウルといった都市を巡り、遭遇する人々の形姿を捉えた鮮烈なストリートスナップによって若くして評価を確立しました。しかし崩壊直前の旧ソビエト社会主義共和国連邦を取材した1991年[*3]を前後して、変化を追い立てる時代の潮流に呼応するかのように、突如、それまでのスナップショットを放棄。以降、試行錯誤を重ねるなかで、無徴の人々を定点観測的に撮影する〈PORTRAITS〉や、東日本大震災の被災地域を含む、日本各地のマージナルな風景を記録し続ける〈UNTITLED RECORDS〉といった、近年のシリーズに連なるソリッドかつ思惟的な作風へと転向を果たします。

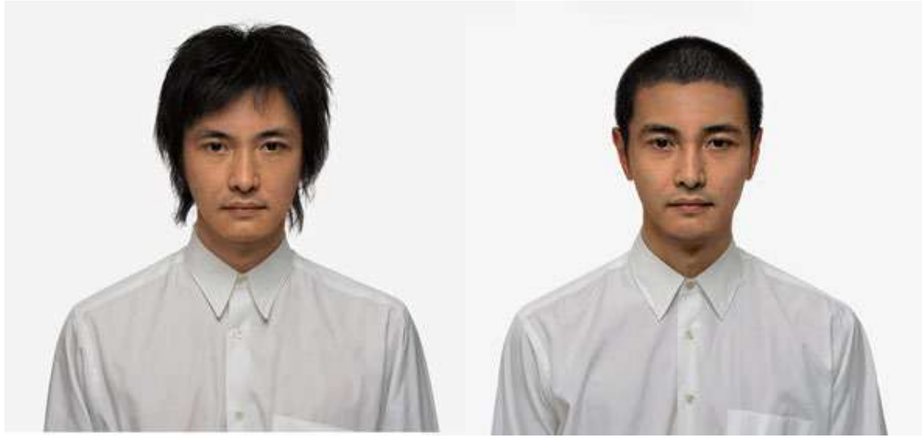
被写体や撮影スタイルの劇的な変遷を辿った北島は、同時に自身の仕事を読み返し、作品を再構成するという作業を繰り返してきました。本展では、北島のキャリアの中で二度、象徴的に現れるフレーズ「借りた場所、借りた時間」を手がかりに、写真家自身の手によるニュープリントや、重要な作品発表の場として機能した雑誌や写真集などの資料を通じて、その50年にわたる仕事の読み返しを試みます。

[1] 森山大道「白昼の通り魔 北島敬三」、北島敬三『写真特急便［東京］』パロル舎、1980年。
[2] 無署名「ストロボ一発に問題」『カメラ毎日』1976年9月号、40頁。
なお、後に北島の理解者となった西井は、雑誌や自身が企画する写真展等で北島を取り上げている。
[3] ソ連での取材から16年を経て、現地で撮影された一連の写真を再構成した写真展「USSR 1991」（銀座ニコンサロン、2007年）で第32回伊奈信男賞受賞。

ヴァリニュス 1991年9月29日 | Courtesy of the artist ©KEIZO KITAJIMA

East Berlin 1989 | Courtesy of the artist ©KEIZO KITAJIMA

TOKYO 1979 | Courtesy of the artist ©KEIZO KITAJIMA



シリーズ〈PORTRAITS〉より | Courtesy of the artist ©KEIZO KITAJIMA

北島敬三 | Kitajima Keizo

1954年長野県須坂市生まれ。大学を中退した1975年に「WORKSHOP写真学校」森山大道教室に参加。同校解散後、新宿2丁目に森山らと自主運営ギャラリー「イメージショップCAMP」を立ち上げる。70年代後半からコザ、東京、ニューヨーク、東西ベルリン、プラハ、ブダペスト、ソウル、旧ソ連などで撮影したスナップショットを発表するも、1991年に刊行された写真集『A.D.1991』を境に「風景」と「肖像」の連作へと大きく制作のスタイルを転換させる。写真家として中上健次や島田雅彦らと協働するほか、2001年以降は岸幸太や笹岡啓子らと「photographers' gallery」の運営に携わる。主な写真集に『写真特急便［東京］』（パロル舎）、『New York』（白夜書房）、『A.D.1991』（河出書房新社）、『THE JOY OF PORTRAITS』（Rat Hole Gallery）、『USSR 1991』（LITTLE BIG MAN）、『UNTITLED RECORDS』（BankART1929）、『NEW YORK』［新版］（PCT）、『USSR 1991』［新版］（PCT）等。写真集発表の傍らで『Kula Intercity Photo Magazine』（1988–1989）『photographers' gallery press』（2002–）の発行を手がける。主な受賞歴に日本写真協会新人賞（1981）、第8回木村伊兵衛写真賞（1983）、第32回伊奈信男賞（2007）、第41回土門拳賞（2022）等。

［北島敬三写真展 借りた場所、借りた時間 関連展示］
岸幸太「彼の地、飛地」／笹岡啓子「The World After」「Park City」／篠田優「Voice(s)」

北島らによって2001年に立ち上げられた「photographers' gallery」。ギャラリーとしての展示機能に加え、機関誌や写真集の刊行、レクチャーの企画など、写真メディアに対する批評精神に根差した幅広い取り組みの拠点として多様な写真表現の揺籃の場となっています。本展では同ギャラリーの現・メンバーである岸幸太、笹岡啓子、篠田優の3名の写真家の作品を通じて、70年代後半以降の自主運営ギャラリーの系譜に連なりながらも、なお特異な発信を続ける「photographers' gallery」の現在をご紹介します。

会期 | 2025年11月29日［土］–2026年1月18日［日］
会場 | 本館1階交流スペース・オープンギャラリー
観覧無料

［関連イベント］
ギャラリートーク | 北島敬三×松井正（長野県立美術館学芸員）
日時 | 11月29日［土］14:00–　会場 | 展示室1・2・3

関連トークイベント① | 岸幸太（写真家）×高橋しげみ（青森県立美術館学芸員）×松井正
日時 | 11月29日［土］15:00–　会場 | 本館B1Fホール

関連トークイベント② | 篠田優（写真家）×松井正
日時 | 12月6日［土］13:30–　会場 | 本館B1Fホール

映画「カメラになった男―写真家 中平卓馬」スクリーニング&トーク |
小原真史（監督・東京工芸大学准教授）×北島敬三×松井正
日時 | 12月6日［土］18:30–　会場 | 長野相生座・ロキシー（長野県長野市権堂町2255）

関連トークイベント③ | 笹岡啓子（写真家）×倉石信乃（明治大学教授）×松井正
日時 | 12月7日［日］13:30–　会場 | 本館B1Fホール

関連トークイベント④ | 北島敬三×倉石信乃×高橋しげみ×松井正
日時 | 2026年1月11日［日］13:30–　会場 | 本館B1Fホール

・いずれも参加費無料（ただしギャラリートークにご参加の方は要観覧券）、事前申込不要。